

第17回研究大会報告

日本バレーボール学会第17回大会が2012年3月10日(土)、11日(日)に、慶應義塾大学を会場として開催されました。今回のメインテーマは“復興・再生におけるスポーツの貢献を考える”でした。東日本大震災からちょうど1年を経過した現在、スポーツが復興にどのように貢献することができるのかということについて、シンポジウムでは様々な立場から話題提供がなされました。2日目のオンコートレクチャーでは、「バレーボールにおける瞬発的な動作開始を考える」というテーマで、バドミントンやテニスなどの他種目と比較して議論が繰り広げられました。

2日間で約200名を超える参加者があり、各会場で熱心なやりとりがみられました。

シンポジウム

『復興・再生におけるスポーツの貢献を考える』

実行委員長の慶應義塾大学 石手靖氏の開会の挨拶に続いて、日本バレーボール学会会長の遠藤俊郎氏より開会の挨拶があり、シンポジウムが開始された。なお、シンポジウムの冒頭に震災により亡くなった方への黙とうがささげられた。司会は慶應義塾大学 石手靖氏、講師は松沢成文氏(前神奈川県知事)、増田久士氏(釜石シーウェイブスRFC 事務局長)、村山光義氏(慶應義塾大学)であった。



最初に、司会の石手氏よりスポーツができる復興支援というテーマについての趣旨説明がありシンポジウムが開始された。

最初に登壇した松沢氏の紹介があり、講演が開始された。自己紹介の中で松沢氏は大学でラグビー部に所属していてスポーツに慣れ親しみ、チームスポーツの中でチームワーク、リーダーシップを学んだと述べた。知事時代にはスポーツ振興に取り組み、特にスポーツチームが地域に密着し活動する環境や枠組み作りに取り組んできた。その中で、スポーツチームと地域がWIN-WINの関係であることが重要であり、そのためには地域の企業が地域のスポーツチームを支えることが重要であると考えている。これは、スポーツが与える人々への影響は非常に大きく、スポーツ選手達は子供たちの憧れのまゝであるためである。

そのようなスポーツ選手や関係者の被災者への支援の形は様々な形で行われ、選手個人で寄付金を出したり、団体でチャリティーを行ったり、義援金を集め送ったりしている。さらに、選手達が被災地を訪れスポーツや運動に取り組むイベントを開催したりしている。

我々は、スポーツを観ることで感動を味わうだけでなく、プレーすることで参加することもできる。特にこれからの時代は全ての年齢の人が参加できる仕組みを整備することが必要であると思われる。自分にも地域のスポーツ活動を支えた経験があり、スポーツ活動に参加する子供やそれに付き添う親達にとっても、様々な交流を行う場となっていた。そして、地域のクラブなどで活動を行うためにはリーダーが重要となる。このように日本もヨーロッパのように地域のクラブが整備されて行くことが地域振興、スポーツ振興にとって重要であると考えられる。

また、別な視点でこれからの日本は高齢化社会が進むわけだが、その際には予防医療としてのスポーツのあり方を考える必要があり、その一つにスポーツの役割がある。スポーツや運動をするということによって人が集える場所があれば、高齢期の老人にとっては互いの存在を確認し合う機会にもなる。このようなことで、スポーツは高齢化社会にも対応できる地域社会の想像に繋がるのではないかと思う。



次に増田氏が登壇した。司会から紹介があり、スポーツクラブの経営的観点から講演が行われた。

最初にクラブ誕生の経緯と日本ラグビーの立ち位置の説明があり、ラグビー界の中で、自らを地域とスポーツが一体となった形の先駆者的な存在

であると考えていると述べた。

現在のトップリーグラグビーはプロの集団になっている。その中で、チームはトップリーグ再昇格を目指し地域と共に活動して、地域と共に生きる形の創造を常に行って

いる。現在は地元企業の協力もありチームの中でプロ選手を徐々に増やすことができてきている。

また、普及活動も総合型スポーツクラブのモデル事業となり活動を行っている。普及活動に参加してくれてた人々がクラブを支えるボランティア等としてクラブの活動に関わってくれている。このようなクラブの活動において、楽しいスポーツと勝つためのスポーツがどのように融合するかが重要であると考えている。

昨年の震災後、選手たちは当然プレーを続けることは出来ず、物資の運搬などを手伝っていた。そのような状況の中で、物資を運んだ避難所で被災者からプレーをしろという声が上がってきたため活動を再開することができた。活動を再開すると様々なチームからの応援もあり選手達も積極的に活動ができるようになった。このような体験を通して感じられたのはスポーツを通して心が一つになれるということである。

現在は日本で行われるワールドカップの試合を誘致するというプロジェクトも進行させている、当然施設の整備から始めなければならない、その予算の確保など難しい面は多い。しかし、地域によって違いはあるだろうが、復興を目指したときにスポーツは役に立つ、それには何らかの形でスポーツが継続されていくという地域に根差すようなスポーツの在り方が重要である。

最後に村山氏が登壇し司会からの紹介後、大学体育の現場の事例からということで、全国大学体育連合の震災復興に向けた貢献活動に焦点を当て講演が始まった。



はじめに大学体育連合について、大学の教育という枠組みの中で体育を充実させるための組織であるとの説明があった。この大学体育連合としての復興支援はその会員や会員校への関わりということで行われてきている。例えば、補助金については被災した現地が求めている物資をダイレクトに配布できる仕組みを作り活用し、さらに被災地の子供達などが行うスポーツ活動や彼らを招待した活動などの草の根的な被災地へのスポーツ（運動）活動を行っているところへ援助をしてきている。

ではスポーツとはなんだろうか？大学体育連合のスローガンはスポーツを届けようである。スポーツとは頂点を目指すものそして挑戦、感動のシンボルである。我々はスポーツを観て感動し、元気づけられる。これはスポーツだけでなく歌手などアーティストの活動も同様である。ウォーキングや登山はスポーツに非常に近いものであるが、スポーツと運動の境界線はどこにあるのだろうか？

そもそも、スポーツとは生活の中の身体活動である。また、スポーツには常に新しいものが作られていく。語源的に、スポーツとは遊びであり、文化の創造と伝承でもある。そのため、スポーツは文化そのものであるといえる。このようにスポーツとは遊びであるともいえる、したがって支援も遊びの段階から始めるべきではないだろうか。

また、スポーツは自己実現欲の代名詞であると考えられるが、マズローの人間欲求の5段階説では基本的な欲求が満たされなければ、その上にある自己実現欲は満たされることはない。そのためには、スポーツに取り組むには基本的な欲求が満たされるという意味で社会が発達している必要がある。復興とスポーツという関係の中で、高いレベルのスポーツができるようにしていくという社会の方向であっていい。しかし、被災した社会環境が整備されていない状態の被災地にスポーツができる立場からスポーツを押し付けるわけにはいかない。

一方で、オリンピック招致のため復興オリンピックと銘打っているものの、実際には被災地との関係性は見えてきていない。被災地が実際にオリンピックを招くための道具ではなく、シンボルの一つになる必要がある。そのため、その時にはしかるべき種目や関連したアクティビティーが被災地で開催されることも必要であると考えられる。

このように考えると、復興のためのスポーツとは生活基盤が整い、遊びの要素が受け入れられる状況にあり、日々の文化活動としてのスポーツ、運動を実践する場を提供することが必要であると考えられる。このことは、頂点としての強いスポーツだけでなく、人々の文化的活動として築き上げられてきた優しいスポーツを日々の生活の中に取り戻すための場の提供などの活動が必要と考える。

質疑応答



- Q1: オリンピック等の世界大会を招致することの意義は？
 A: 松沢氏 国がステップアップしていくための国民が協働できるイベントである。その上で復興をアピールできる場となるのではないかと。